Pick up Feature

名古屋国際のキャンパス内の分別ごみ箱近くにある
『段ボールのボックス』に気がついた国際生も少なくないのでは?
実は本校生徒会が取り組み始めた世界の子どもを救う国際的なキャンペーンのボックスなのです。
今回はキャンペーン活動を始めた生徒会長の
横山泰章君(国際教養科3年生)にお話を聞きました。

世界の子どもたちの命をペットボトルキャップで守ろう!

Satoru SUZUKI

◀キャンペーン活動の経緯について話す横山君

TIMES:段ボールのボックスの中にペットボトルのキャップがいっぱい入っているのを見かけましたが、栄養不良に苦しむ世界の子どもたちとどのような関係があるのですか?

横山君:分かりにくいですよね(笑)。簡単に説明します。まず、不要になった飲料用のペットボトルキャップを回収して、キャンペーンに取り組んでいる企業に届けます。そこから、キャップはリサイクル業者に買い取っていただき、リサイクル商品に生まれ変わり、企業はその対価を発展途上国の子どもたちの支援活動をしているNGOに寄付をして、栄養給食として子どもたちに届けるという関係になっています。

TIMES:企業とNGOのネットワークによって成り立っているようですね。キャンペーン活動に取り組もうとしたきっかけは?

横山君:名古屋国際の生徒会ですので、「国際的な取組み」に関係するものは何か無いかと調べていました。そんな時、偶然このキャンペーンを知りました。この活動だ!と思い、生徒会役員に提案したところ、すぐに賛成が得られて、その日のうちにキャンペーンボックスが出来上がったのです。

TIMES:キャンペーンボックス設置後の反応はどうですか?

横山君:想像以上に協力的だと僕は感じています。回収できたキャップの数も8月末の時点で、5000個を超していますので、このキャンペーンが小さな国際貢献の1つになっていると考えています。

TIMES:この活動はいつ頃まで続けるのですか?

横山君:会長の任期もありますので、今年の秋までは活動を続けます。その後は、次の生徒会が引き継いでくれたらなと思っています。これからも国際生のみなさんのご協力をお願いします!

▲分別ごみ箱の近くに設置されているキャンペーンボックス

ペットボトルキャップ
2000個で…

栄養給食
1食分を支援

各国活動支部

アフガニスタン・カンボジア・パキスタン・バングラディッシュなどの保健省や国際機関(UNICEF/WHO)の活動によって現地の子どもたちに栄養給食が行き渡ります。

Thinking about the Future

[国際生OB OGから現役国際生へ]

Message to Students

大学の勉強は教えてもらうのではなく自分から学ぶ姿勢が大切

立命館大学 法学部(2008年度卒業)
波多野 潤さん

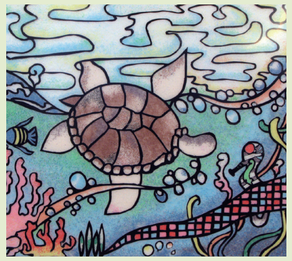
立命館大学に入学して数ヶ月が経ちました。初めての一人暮らし、慣れない環境に悪戦苦闘しながらも少しずつではありますが、自分の生活スタイルを見つけ出すことができました。

勉強面でいえば、なにもせずに参加してまったく内容が理解出来なかった授業。その失敗をバネに、予習を講義の空き時間にやったり、その授業に関する参考図書を読んでみたりと大学の勉強は教えてもらうのではなく、自分から学ぶ姿勢が大切だということに気づかされました。それから、大学では自分から進んで人とかかわって行かない限り繋がりは生まれません。言い換えれば、高校のクラスのように毎日顔を合わせることがないので、無理に仲良くなる必要もなければ、仲良くなるきっかけもほとんどないのです。そこでサークルが大切になってきます。サークルでは違った学部、違った年齢の人と活動を通して仲良くなるきっかけを作ってくれます。ちなみに私はバレーボールのサークルとESSという英会話のサークルに入りました。これからもまだ課外活動に積極的に参加していこうと思います。しばらくは慣れない大学生活でつまずくこともあるかもしれませんが、その時は名古屋国際で得た諦めないフロンティアスピリットを生かし、頑張っていこうと思います。

NAGOYA INTERNATIONAL JUNIOR HIGH SCHOOL MUSEUM フロンティア美術館 4

「力作ぞろいの砂絵作品」

今回紹介する作品は「ステンドグラス風砂絵」です。この課題は2年前から高校課程に取り入れたのですが、それまで美術にあまり興味のなかった生徒も、この課題に関しては、別人のように夢中になって制作を楽しんでいます。ステンドグラス風という条件を満たすよう、デザインに工夫を凝らし、台紙にカッターナイフで切り込みを入れ、思いのままに色砂を振りかけていく。このような段階を踏んで生み出された力作ぞろいの中で特に目を引く作品には、「色の響き合いが美しい」「変化に富んで飽きさせない構図」「今までに見たことのない独自性がある」などの共通点が見られます。さて、下の写真の作品は、現在中高一貫6年に在学中の高比良渚さんが創り上げたものです。画面から音楽が漂ってくるかのように表現したかった。そして、潮の流れなど目には見えないものを表現したかった、という彼女の作品からは、なるほど確かに海の生き物たちの優雅な息づかいが聞こえてくるかのようです。
(美術科:鈴木悟:館長)

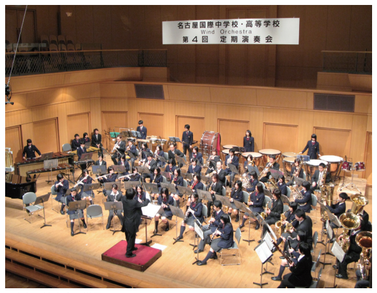


Hot! Information

Wind Orchestra 第5回 定期演奏会
2009年12月27日(日) 12:30開場/13:00開演

私たち吹奏楽部にとって最も演奏機会の多い2学期に入りました。10月の私学連合音楽会、11月の光楓祭、名古屋吹奏楽フェスティバルと多くの演奏活動を予定しています。特に毎年夏休み前から練習を始め、12月に向けて猛練習を重ねる定期演奏会は1年の締めくくりとなる大ステージです。今年はソリストにジャズユーホニアム奏者、照喜名俊典氏をお招きし、ウィルあいちでのコンサートになります。夏休みは部員一同熱のこもった練習を毎日続けてきました。演奏レベルはまだまだNo.1ではありませんが"Only One"のご満足頂ける演奏会にしたいと思っています。是非聴きに来てください。(中高一貫5年:國領さおり:吹奏楽部部長)

- ●場所/ウィルあいち
  地下鉄「市役所」駅 2番出口より東へ徒歩約10分
  名鉄瀬戸線「東大手」駅南へ徒歩約8分
- ●入場無料 (下記招待券をお持ちください)
- ●指揮:武藤浩司(吹奏楽部顧問)
- ●ゲストソリスト:照喜名俊典(ジャズユーホニアム奏者)
- ●プログラム:歌劇「トゥーランドット」より(プッチーニ)
  Good Bye Porky (照喜名氏自作自演)
  パリのアメリカ人(ガーシュウィン) 他



▲去年の演奏会の様子

(切り離して演奏会当日にご持参ください)

NAGOYA INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL
WIND ORCHESTRA
第5回 定期演奏会
2009年12月27日(日) 12:30開場/13:00開演
入場無料

田代小学校訪問演奏
2009年8月21日(金)

吹奏楽部が名古屋市立田代小学校を訪れ演奏会を催しました。国際生の演奏に続き、後半は小学生との合同演奏を3曲披露しました。小中高の学年をこえた楽しい演奏会になり、その後のパート練習では国際生が小学生に演奏のアドバイスをするなど、良き先輩ぶりを発揮していました。

THE FRONTIER TIMES Report

1 秋季野球大会 県大会出場決定! 春の甲子園への第一歩

©PHOTO HOUSE MIKASA

山本静夫監督(1983年度卒業)を迎えての新チームが、秋季名古屋地区大会で勝利し、県大会への出場が決定しました。この秋季名古屋地区大会を振り返ってみると、8/17の惟信高校との延長11回を戦い抜き、翌日の再試合で見事に勝利したことが、名古屋国際の選手を大きく成長させた。

また、他校の試合を見ての教訓も成長を助けたと言える。油断とエラーがどれだけチームに迷惑をかけるかを目の当たりにして、「野球はゲームセットの声を聞くまで緊張感を持続させなくてはいけないスポーツ」と再認識。秋季愛知県大会は「春の甲子園」への第一歩である。東海大会出場を目指して頑張れ!

2 NUCBアーチェリー部は今年で42年目

Kei SUGIURA

私たちが所属するNUCBアーチェリー部は今年で42年目を迎える大変歴史の長い部活動の一つです。かつては、全国大会に出場や数々の大きな大会に出場する名門部でした。そんな、先輩方の頑張りに触発された私たちは、部活動にあてられる時間は限られていますが日々練習を重ねています。系列校の名古屋国際出身の生徒も今年から数多く入部し、現在部員は24人となっています。もちろん経験者もいますが大学から始める人が多いアーチェリーの楽しさを私たちと一緒に体験しませんか?(2007年度卒業 杉浦圭)

ジョージ校長の映画名セリフ集 Great Dialogue from the Movies

"You know how to whistle don't you, Steve-just put your lips together and blow."

(口笛の吹き方は知っているわね、スティーブ? 唇をとがらせて、吹くだけよ。)

この有名なセリフは1994年の映画「脱出」に出てきます。脚本のウィリアム・フォークナーがアーネスト・ヘミングウェイの同名小説を脚色した映画です。主役は3人、ハリー・モーガン(ハンフリー・ボガード)、相棒のエディー(ウォルター・ブレナン)、そしてハリーのロマンスの相手"スリム"(ローレン・バコール)。上のセリフは彼女のセリフで、なぜか彼女はハリーを"スティーブ"と呼び続けています。ハリーはフランス領マルティニーク島のはやらない貸しボート屋ですが、やがて彼らは第二次世界大戦中の反政府派の動きに巻き込まれて行きます。

この作品は魅力的なセリフのちりばめられたロマンティック・アドベンチャー映画として知られ、ハワード・ホーク監督の最高傑作である事は間違いありません。

This famous line comes from the 1944 film "To Have and Have Not". The screenplay was adapted by William Faulkner from Ernest Hemingway's novel of the same name. The action focuses on three main characters—Harry Morgan (Humphrey Bogart), his sidekick Eddie (Walter Brennan) and Harry's romantic interest "Slim" (Lauren Bacall), who utters the famous line above. For reasons that are not entirely clear, she insists on calling Harry "Steve". Harry runs a charter boat business, but customers are few in number. Eventually, the main characters get involved in the Vichy resistance in World War II in French-held Martinique. It is considered a romantic adventure film that is filled with delightful dialogue. It is arguably director Howard Hawks' masterpiece.